体育科学習指導案

体育保健体育科研究室

1　単元名　　５年生「サッカー」（８時間）

2　運動の特性

（１）一般的特性

２つのチームが入り交じってボールを奪い合い，足を使ったパスやドリブルなどで相手の守りをかわし，ボールをゴールの近くに運び，シュートをして得点を競い合うことが楽しい運動である。また，ボール操作の技術が高まったり，攻め方，守り方などの作戦を工夫したりすることによってさらにゲームの楽しさが深まる運動である。

（２）子どもから見た特性

Ａ　運動の特性にふれる楽しさ体験の状況

本学級の子どもたちに，事前のアンケート調査を行ったところ，３３人中２１人がサッカーは「すき」「まあまあすき」と答えている。その理由として「ボールをけるのがすきだから」「ゲームがおもしろいから」などと答えている。一方で，「きらい」「どちらかといえばきらい」と答えた子どもの理由としては「いろいろルールを知らない」「パスとかがねらった方向にいかない」などと答えている。また，ボールゲームが「すき」「まあまあすき」と答えた子どもは３０人おり，他のボールゲームに比べると，子どもが嫌う傾向にあることが分かった。その理由としては「うまくけれない」「へただから」などの技能的な理由が挙げられていた。

Ｂ　技能の習得状況

アンケートでの，子どもの意識調査の結果は，パスを上手にできると答えた子どもが２４人，ドリブルを上手にできると答えた子どもが１６人，シュートを上手にできると答えた子どもは２０人であった。しかし，実際に行った技能調査では，ゴールから１０ｍ離れたところからシュートを強く蹴って狙うことができる子どもは５人，狙って蹴ることができる子どもが１１人程度であった。また，ドリブルからシュートの動作までをスムーズにできる子どもは６人程度であった。このことから，実態と子どもの意識とがかけ離れている部分が大きいと思われる。

また，アンケートとは別に実施したセンステストでは，１００点中９０点以上の子どもが１４人，８０点～８９点の子どもが１１人，７９点以下の子どもが８人であった。さらに，項目別に見てみると，パスに関する項目の平均得点が一番高く２２.５８点（２５点満点），一番低い項目がシュートの項目で２０.１２点であった。シュートに関しては消極的な行動を選択する傾向が見られた。センステストでは比較的に高い点数が得られていたが，実態調査の様子と合わせると，動きながらセンステスト同様の状況判断をすることは困難と思われる。

Ｃ　学び方に関する学習経験の状況

本学級では，１学期にバスケットボールの学習を実施した。その際に，チームごとに，めあてや作戦を考えたり学習後の振り返りをしたりすることを経験している。さらに，個人的な振り返りをし，ノートに記入することもできていた。アンケート調査においても，きまりを守ってみんなと仲

良く学習できると答えた子どもが３１人，ボールゲームの学習でめあてを立てて学習ができると答えた子どもが２２人であった。

3　学習を進めるにあたって

本単元の中で，サッカーに必要な技術を身に付けさせ，さらには「ゴールに入るようにねらってシュートする」「味方の位置を考えてパスを出す」「ボールをキープしてパスのコースを探す」などのボールを保持したときの意識や「シュートをねらえそうなところに動く」「ボールとの距離を考えて，パスがもらえそうなところに動く」「作戦を意識して動く」などのボールを保持していないときの意識を身に付けさせるために，以下のように学習過程を仕組んだり支援を行ったりしていく。

○　学習過程

本単元は「ステージ型」の形式で学習を行う。めあて１では前半に３対１の状況設定ゲーム（以後ＳＳゲーム）を行い，後半は３対３のゲームを行う。サッカーの動きに慣れさせるとともに，ゲーム中のポジショニングに重点を置き，攻撃する際に必要な知識を身に付けさせながら，ゲームを楽しませたい。

めあて２では，前半で３対１や３対２のＳＳゲームを行い，後半は３対３の総当たり戦を行う。ＳＳゲームではメンバーを生かしたパス回しに重点を置いたサッカーの動きや知識を身に付けさせていき，後半の総当たり戦では，身に付けた動きや知識を生かしながら，総当たり戦の順位などを意識した競争型のゲームで楽しませていきたい。

○　支援

本単元にて，ねらいを達成していくために，以下のような支援を行っていく。

・めあてのもたせ方について

めあて１・２ともに，学習ノートを活用していく。毎時間，活動の中で気付いたことをまとめて記入させ，めあて１では次の時間のチームのめあて，めあて２では作戦を考えるのに役立たせていきたい。めあて２では，作戦図を書き込めるスペースを設け，メンバーのポジションを意識させるとともに，実際のゲームでの状況判断につながる手がかりを考えることができるようにしていく。また，教師も状況に応じた動きを中心に，学習ノートを通しての支援を行っていく。

・用具や場・ルールなどについて

ボールについては，子どもの体格差などを考慮し，クッションボールを利用し，ボールに対する恐怖心を取り除いていきたい。また，準備や片付けを行いやすいように，計画表を常掲しておく。さらに，学習中に見られたよい動きを学級全体に広げていくために，コミュニケーションボードを準備し，動きを伝えやすくする手立てとする。コートの大きさは３対３でゲームを行うのに適したサイズ（１６ｍ×３０ｍ）で行う。また，子どもたちが自分たちで準備できるように，コートのコーナー等に目印をつけておく。ルールについては，はじめのルールを提示するが，子どもの実態に合わせて，ルールの付加を行うことも考えていきたい。子どもから出てきた意見を中心にルール作りを行っていくが，状況判断が複雑になりそうな意見等は排除していき，逆によりよく動けたり状況判断できたりしそうなことに関しては，教師からも意見を提示していく。

・練習方法，資料活用などについて

ＳＳゲームやめあて１のゲームにおいては，ゲームストップを活用し，子どもたちに動きを考えさせたり，必要に応じて指導したりするなどし，状況に応じた判断が身に付くようにしていく。また，毎時間ビデオ撮影を行い，状況に応じたいい動きや動き方を考えてほしい状況などを紹介し，状況に応じた判断力を高めていきたい。また，チームタイム等において，個々の動きをイメージしやすいように，各チームに作戦ボードを配布し活用させていく。

4　学習のねらいと道すじ

（1）学習のねらい

状況に応じてパス，ドリブル，シュートをしたり，動いたりして３対３のサッカーを楽しむ。

（2）学習の道すじ

めあて１・・・サッカーの動きやルールに慣れながら，ゲームを楽しもう。

めあて２・・・チームごとに作戦を立てて，ゲームを楽しもう。